

ローマ時代のテーセウス像

——ディオドロス・アポロドーロス・プルタルコス——

内林謙介

I. 序

i. テーセウス伝承を全体として扱うことの困難

テーセウスはギリシア神話の中でも、もっとも有名、かつ、古い起源をもつ英雄のひとりである。ホメロスの頃はミノタウロスを退治し、女性たちをさらい、冥界に下って女神までも強奪しようとして罰を受けた典型的な神話的な英雄であった*1。それが、ペイシストラトスの僭主政治、クレイステネスの改革による民主制の確立を経て、アテーナイの国力が増してくると、サロニコス湾の怪人・怪物退治の伝承が登場しはじめ、ヘラクレスのような（あるいはそれに対抗できるような）人類の恩恵者としてのテーセウスが前面に出てくるようになる（サロニコス湾の冒険の物語は、紀元前6世紀の終わりには出揃っている*2）。さらに、古典期には、テーセウスはソポクレスによってオイディプスを助けるなどの理想的なポリスの指導者とされたり*3、エウリピデスによって民主制の擁護者にされたりする（E. *Supp.* 399–462）。また、トゥキュディデスによれば、集住を行い古代アテーナイの基礎を作った政治的指導者であった（Th. 2.15）。このようにテーセウスは、

*1 *Il.* 1.263–5; *Od.* 11.321–325, 631; Hesiod. Fr. 235a–b, 243 (断片番号は Loeb の Most による。)

*2 cf. H. J. Walker, *Theseus and Athens* (1995) 41.

*3 *Ibid.* 171–193.

作家によって、また時代によってハイライトされる事績や性格がちがう英雄であり、しかも、その伝承の中には、冥界下りのような極めて非現実的なものと、集住のような政治的で現実的なものが混在している。

だから、テーセウス伝承を全体として理解し、テーセウスがどのように生まれ、どのような人生を送り、どのように死んだかという一代記を叙述しようとする、相互に矛盾する性格を調整し、伝承中の現実的な要素と非現実的な要素を調和させなければならないという大きな困難に直面する。

ii. ローマ時代の3人の散文作家のテーセウス伝承を取り上げる意義

ローマ時代に、この困難な課題を背負ってテーセウス伝承を全体として理解しようとした3人の作家がいる。歴史家のディオドロスと、神話作家のアポロドーロス、『対比列伝』の作者のプルタルコスである。プルタルコスは伝記を書くのだからテーセウス伝承を全体として扱うことは当然である。ディオドロスとアポロドーロスは、テーセウス伝を書いたわけではなく、それぞれの歴史書、神話集の中にテーセウス伝承を収録している。しかし、この両者はテーセウスが生まれてから死ぬまでの伝承を、ほぼもれなく時系列に並べて叙述している。このような形式で叙述を行おうとすれば、テーセウス伝承が錯綜しているのはすぐに明らかになることで、ディオドロスとアポロドーロスがよほど無能な作家でないかぎり、なんらかの方針を立てて、伝承を整理し、一貫性を持たせようとするだろう。

本稿では、3人のテーセウス伝承についての叙述を比較検討し、各作家のテーセウス像の特徴を浮かび上がらせる。特に、時代時代によって注目される性格が異なるテーセウスを、どのような内面を持った英雄として描くかに注目する。このことによって、錯綜した伝承をもつテーセウスが、ローマ時代の立場の異なる3人の散文作家にどのよう

に受容され、理解されたかを示す。テーセウス伝承へのそれぞれの作家の対処の仕方を通じて、古代における伝統の継承と発展の一例を示すことができるであろう*4。

同時に、テーセウス伝承の特色である現実的要素と非現実的要素の混在を、それぞれがどのように解決するかにも着目し、3人の散文作家が現実との関係において神話をどのように認識しているかを考える。このことが明らかになれば、ローマ時代の散文作家の視点から、という限定付ではあるが、「ギリシア人にとって神話とは何であったか」、という大きな命題を考える上での一助となるはずである。特に今日、ギリシア神話の大きな取材源であるにもかかわらず、研究が盛んとはいえないアポロドーロスの叙述傾向の一端を解明することは意義があるはずである*5。

II ディオドロスとプルタルコスの方針

この3者のうちの2者、ディオドロスとプルタルコスがテーセウス伝承のような神話的事跡を叙述するに当たっての方針を自ら明記してくれているので、まず、それを見ておく。

i. ディオドロスの方針

ディオドロスはその膨大な歴史書『世界史』の第4巻でギリシア神話を扱っている。その冒頭において、まず、自分は相互に食い違う神

*4 ローマ時代に神話を扱った散文作家は、古い伝承を忠実に伝えているかどうかで価値が判断されるくらいで、作品自体が高い評価を得ているとは言いがたい。最近の辛らつな評価は、A. Cameron, *Greek Mythography in the Roman World* (2004) にみえる。ただし、プルタルコスは別である。

*5 近年(2007年)に発表されたアポロドーロスの英訳書に、代表的なアポロドーロスの研究としてあがっているのは、依然として、1935年の Diller の論文と 1958年の van der Valk の論文である。R. S. Smith, S. M. Trzaskoma, *Apollodorus' Library and Hyginus' Fabulae* (2007) xli.

話（ディオドロスは *μυθολογία* という言葉を使っている）を取り扱うことが難しいのは知っているし、名のある歴史家たちが神話を書くことを回避しているのは知っている」と述べる。

しかし、神話に登場する「半神、英雄、多くの偉大な人々によって成し遂げられた業績 (*πράξεις ὑπὸ τῶν ἡρώων τε καὶ ἡμιθέων καὶ πολλῶν ἄλλων ἀνδρῶν ἀγαθῶν**6)」が人類史のなかで一番重要で数も多いので、あえて取り上げるとする (4.1.4)。つまり、神話的事跡は扱うのが困難だけれども、そのなかの人物が成し遂げた業績を無視することができない、というのが、ディオドロスがテーセウスも含めた神話に登場する神々や人物を記述する理由だった、ということになる。ディオドロスは人類の歴史は環境的な「必要 (*χρεία*)」と偉大な人物の「恩恵 (*εὐεργεσία*)」によって進む、と考えており、もっとも大きな「恩恵」をもたらした神話上の人物を無視することができなかつたのである*7 (このディオドロスの人類史の思想には、デモクリトスの影響や、君主制をとっていたヘレニズム期の政治体制の影響があるといわれる*8)。ディオドロスは歴史叙述には向かないことを承知で神話を叙述するわけであるから、現実性を犠牲にすることが予想できる*9。

*6 テキストは、Fr. Vogel, *Diodorus Bibliotheca Historica* Vol. I (Teubner 1888) による。

*7 デイオドロス自身は、エウヘーメロスを紹介していることなどからも分かるように、神話の真実性について冷淡だったようである。cf. A. Volkman, 'Die indirekte Erzählung bei Diodor', *RhM* 98 (1955), 354–367.

*8 K. Sacks, *Diodorus Siculus and the First Century* (1990), 55–82.

*9 デイオドロスはヘラクレス神話を叙述するに当たって、ヘラクレス神話を「われわれの時代の行為と等しいものとして (*ἐπ' ἴσῃς τοῖς πραττομένοις ἐν τοῖς καθ' ἡμᾶς χρόνοις*)」現実的に解釈するのは不当であり、自分は「もっとも古い詩人や神話作家に従う (*ἀκολουθῶς τοῖς παλαιοτάτοις τῶν ποιητῶν τε καὶ μυθολόγων*)」としている (4.8.3–5)。

ii. プルタルコスの方針

プルタルコスは、『テーセウス・ロムルス伝』の序文 (*Thes.* 1) において、まず、『対比列伝』を発表し続けてきて、ついに、ギリシアではスパルタの伝説的立法者リュクルゴス、ローマも神秘的な指導者ヌマまでを叙述の対象としてきたが、これよりも昔の話は、詩人、神話作家の領分で、「信じがたく、明瞭でない (οὐκέτι ἔχει πίστιν οὐδὲ σαφήνειαν)」と言うのが適切なことだ、とする。そして、それでもテーセウスとロムルスについて叙述を試みるが、伝承が理性に従って洗われ、歴史のような外観なることはのぞましいけれども、説得的なことやありそうなことをどうしても受け付けない場合は「古代の話 (ἀρχαιολογία)」なので読者はおだやかに受け入れて欲しいと、している。あまりはっきりと方針を示している序文とは言えないが、プルタルコスがテーセウス伝承をできるだけ現実的に書いてみる方針である、ということはおろかすることができる。

III 出生からアテナイ到着まで

続いて、各作家の記述について具体的な検討に入るが、ディオドロス、アポロドーロス、プルタルコスのうち、一番詳しく叙述をしているのはプルタルコスなので、プルタルコスを軸にして、ディオドロスとアポロドーロスを参照していく、という方法を取る。

i. 出生

子供のできなかったテーセウスの父アイゲウスはデルポイに行き、アテナイに戻るまで革袋の突き出た足を解くな、という神託を下される。これは、プルタルコスの解釈によるとアテナイに着くまで女と交わるな、という意味だったが、アイゲウスはその意味がわからず、最も知識があり最も賢いと評判だったトロイゼンの王ピッテウスに相

談に行く。ピッテウスは神託の意味を読み取り、娘のアイトラをアイゲウスと交わせ、テーセウスをつくらせる (*Thest.* 3)。プルタルコスの神話解釈に目新しいところはないが、注目すべき点はふつつある。ひとつはポセイドンが父親であるという古くからの説に真実性を認めず、それはピッテウスの流した嘘であるとしていること。もうひとつは、神託というプルタルコスの時代にもあるアプローチの仕方ではあるが、『テーセウス伝』で神が介在することである*10。プルタルコスでは、アイゲウスは神託に従わず、その結果としてテーセウスが生まれるのだから、事態は神の意図とは違う方向に向かっている、ということになる。

次にアポロドーロスによると、ほとんど同じ神託がアイゲウスに下されるが（解くのが革袋の「足 (πόδα)」ではなくて「口 (ποδάονα)」になっているくらいのちがいである*11)、アイゲウスとアイトラの寢床にポセイドンも現れたことになっている (III. 15.7)*12。アポロドーロスでは非現実的な存在の最たるものである神が、テーセウスの出生のときから登場するのである。

ディオドロスでは、簡単にテーセウスはアイトラとポセイドンの子である、と書いてあるだけで、神託や、どうしてポセイドンの子がアイゲウスの元に行くことになるかなどが書かれていない (4.59.1)。ディオドロスは、アテーナイが尊重したであろうテーセウスの神的な出生について、無視はしないが冷淡なのである。

*10 この他にテーセウスの人生で神託が登場してくるのは、アマゾン族へ遠征した際、都市を建設するきっかけになったことと (*Thest.* 26)、アテーナイの国制改革を行ったときである (*Thest.* 24)。前者は都市を建設した縁起譚であるし、後者はテーセウスというよりは、アテーナイ全体にかかわるものである。したがって、もっぱらテーセウスの人生そのものに影響してくるのは出生のときの神託である。

*11 cf. J. G. Frazer, *Apollodorus The Library* II (1921), 114, n. 1.

*12 cf. Hdt. 6.69.

ii. 怪人・怪物退治

テーセウスは成長し、アイゲウスが残していった剣とサンダルを岩の下から取り上げ、トロイゼンからサロニコス湾をシニスやクロミュロンの猪などの怪人や怪物を退治しながら、陸路を回ってアテーナイに行く。ヘラクレスのような怪人・怪物退治の物語群である。

この箇所ではプルタルコスが、まず、テーセウスの養育係のコンニダスのことを記述し、この人物の存在について、儀礼によって現実味をもたせようとしている。プルタルコスは『対比列伝』の主人公たちの教育に強い関心をもっていた*13。そのためにわざわざ教育者の名前を挙げ、現実性までもたせようとしたのだろう。プルタルコスはこのあとの記述でも、しばしば、現在に伝わる儀礼や神域や建造物を伝承に現実味を持たせるために登場させる。

また、プルタルコスはここで、かなり詳しくテーセウスの内面についての分析を行っている。プルタルコスによればテーセウスが陸路を通ったのは、アイゲウスの剣を汚さずにアテーナイに行くのを恥と考えたからであり、さらに、ヘラクレスへの強い競争心のためであるとする。特にヘラクレスに対する競争心をプルタルコスは強調し、そのことを描写するのに、現実の政治家のテミストクレスがミルティアデスに嫉妬したことを引き合いに出す。そして、次のようにテーセウスの内面を生き生きと描く。

τὸν δὲ πάλαι μὲν ὡς εἴοικε λεληθότως διέκαιεν ἡ δόξα τῆς Ἡρακλέους ἀρετῆς, καὶ πλεῖστον ἐκείνου λόγον εἶχε, καὶ προθυμότατος ἀκροατῆς ἐγένετο τῶν διηγουμένων ἐκείον οἶος εἶη, μάλιστα δὲ τῶν αὐτὸν ἐωρακότων καὶ πράττοντι καὶ λέγοντι προστετυχηκότων*14

*13 D. A. Russell, 'On reading Plutarch's *Lives*', *G&R* 13 (1966), 139–54.

*14 テキストは、K. Zeigler, *Plutarchi Vitae Parallelae* Vol. I (Teubner 1969) による。

ヘラクレスの武勇の名声がすでにテーセウスの心をひそかに燃え立たせていたようで、テーセウスはヘラクレスを非常に誉め、ヘラクレスが何をなしたかを詳しく語る人の話、特に居合わせてヘラクレスの言動を直接見た人の話を熱心に聞いた (*Thes.* 6)。

テーセウスは不可思議な神話上の人物というよりは、現実的な人間のような内面をもっていたことになっているのである。

また、プルタルコスとはできるだけ現実的に書くという前書きの方針にもかかわらず、怪人や怪物退治の物語は『テーセウス伝』に取り入れている。現代からすると、ここの箇所も非現実的ということになるであろう。しかし、プルタルコスは、テーセウスの生きていた時代は「並外れていて疲れをしらないのではないか (ὡς ἔοικεν ὑπερφυεῖς καὶ ἀκαμάτους)」という超人的な人間がいて、その者達は「居丈高な傲慢を楽しみ、暴力の残忍さにふけていた (ὑβρεῖ τε χαίροντας ὑπερηφάνῳ καὶ ἀπολαύοντας τῆς δυνάμεως)」ので、こういうことは現実には有り得ると考えていたようである (*Thes.* 6)*15。ただシクロミュロンの猪については人間の女性だったという異伝も伝えている (*Thes.* 6-11)。

ディオドロスは各怪人や怪物についての説明を一通りしかしていない (4.59)。簡潔な記述しかしらないアポロドーロスも簡単ではあるが、異名や異なる血統を伝えており、ディオドロスが、複数伝わる物語のバージョンを意図的に一本にしぼっていることを読み取ることができる。話を一通りしか採用しない傾向はここだけでなく、ディオドロスの伝えるテーセウス伝承の一般的傾向である。さらに、ディオドロスは、プルタルコスと同じく、テーセウスがヘラクレスに競争心 (ζηλωτῆς ὦν τῆς Ἡρακλέους ἀρετῆς) をもっていたことを明記している。プラタ

*15 このテーセウス時代のプルタルコスの理解にはプラトンの著作が影響しているようである。cf. C. Pelling, *Plutarch and History* (2002) 178-181. ただし、Pelling はプルタルコスはここの箇所を真剣に書いているのではないとする。また、トゥキュディデスも参照 (1.5)。

ルコスは一箇所だけであるが、『テーセウス伝』においてディオドロスに言及しており (*Thes.* 36)、直接に示唆を得た可能性もある。そうでなくても、同じ資料を参照にした、という可能性は高いであろう。

アポロドーロスの特徴は、先にも触れたが簡単な記述ながらいくつかのバリエーションを伝えていること、そして、テーセウスの内面が何も書かれていないことである。アポロドーロスでは、なぜテーセウスが危険な陸路を取るつもりになったのか、という重要な動機についてなにもかかれていないのである (*III. 16–Ep. 1.4*)。重要な場面ですらアポロドーロスがテーセウスの内面を叙述しない傾向はこのあとも続く。

iii. アテーナイ到着とマラトンの牡牛退治

テーセウスはアテーナイに到着する。そして、アイゲウスのもとにいたメデアに暗殺されかけるが、アイゲウスが自分の子であることに気づいてテーセウスを救い、認知される。その後、アテーナイに来てからの最初の業績、マラトンの牡牛退治を行う。

プルタルコスには、まず、メデアによる毒殺の陰謀、印の剣を抜いたことによるアイゲウスのアナグノリシスという神話的な物語はそのまま踏襲している。そして、マラトンの牡牛退治については、政治家として「民衆に取り入る (*δημαγωγῶν*)」ためであったとして、これをテーセウスの初めての政治活動としている(民衆に取り入る、という意味に取らず、民衆を導く、と中立的な意味に取る可能性もあるとする研究者もいるが、政治家としての活動であることにちがいはない*16)。退治の途中でテーセウスを受け入れた老婆へカレが登場するが、ここでも養育係のコンニダスのときのようにその存在が儀礼によって説明される (*Thes.* 12–14)。

*16 A. Wardman, *Plutarch's Lives* (1974), 52–53.

ディオドロスではメデイアが登場せず、テーセウスはアイゲウスに認知され、マラトンの牡牛を退治するが、詳しい経緯やテーセウスの動機などについては言及がない(4.59.6)。

アポロドーロスのバージョンでは、メデイアが出てきてテーセウスを毒殺しようとしてアイゲウスが気づき、アナグノリスになる、というのは同じであるが、マラトンの牡牛退治もテーセウスを殺そうとしたメデイアのそそのかしによるものとされ、神話的な物語の中に牡牛退治は組み込まれていて、テーセウスの現実的な政治家としての側面はあらわれない。一説に、アポロドーロスのこの箇所の叙述は失われたソポクレスの悲劇の要約ではないかと言われる*17 (*Ep.* 1.5–6)。

IV. ミノタウロス退治

次に、テーセウスがクレタ島に渡ってミノタウロスを退治し、リアドネを連れ出すテーセウスにまつわる最も有名な物語について考察する。

プルタルコスはテーセウスがクレタ島へ向かうようになったいきさつについて、まず、アイゲウスが自分の子供(テーセウス)を貢物のくじにいれないことに不満が起こり、これを悲しんだテーセウスが進んでくじなしで貢物に加わったという話と、ミノスが自分で貢物の男女を選ぶのが習慣であり、ミノスによってテーセウスが選ばれたという物語的な話を紹介する(*Thes.* 17)。ただし、前者のすすんで貢物の一行に加わったというバージョンが先に紹介され、内容も詳しいものになっている。後者のミノスが選んだ、というバージョンについてはヘラニコスによるものという注記付きで補足的に触れられているに過ぎない。競争心あふれる政治家、というプルタルコスのテーセウス理解からすれば、前者に重きを置くのは当然であろう。

*17 S. Mills, *Theseus, Tragedy and the Athenian Empire* (1997), 238.

プルタルコス、ミノタウロスとは迷宮に閉じ込められた半身人間半身牛の化け物で、テーセウスがクレタの王女アリアドネの援助によってミノタウロスを退治し、迷宮を脱出したという人口に膾炙している物語に簡単に触れはするが、真剣に扱わない (*Thest.* 15)。

そして、ホメロスやヘシオドスに誉められているのに、アテーナイの神話的なテーセウス伝承の中でいつもクレタのミノス王が悪人として描かれていることを「すなわち、言葉と音楽のあるポリスに憎まれるというのは本当にたいへんなことである (ἔοικε γὰρ ὄντως χαλεπὸν εἶναι φωνὴν ἐχούσῃ πόλει καὶ μοῦσας ἀπεχθάνεσθαι)」と、皮肉 (*Thest.* 16)。その一方で、プルタルコスが筆を割いているのは極めて現実的なバージョンである。ミノタウロスは怪物ではなく人間のタウロスという名前の将軍であって、強いが人気がなく、ミノス王からも疎んじられていた。この将軍をテーセウスがレスリングで負かしたので、ミノスがよろこんで貢物の男女を返した。あるいは、貢物の男女は奴隷にされたに過ぎなかった。さらには、クレタ島を脱出したダイダロスがアテーナイに戻ってきたのをミノスの息子デウカリオンが憤り、アテーナイとクレタが紛争になったので、テーセウスはダイダロスを返すふりをして艦隊をクレタの港に侵入させ、奇襲攻撃でデウカリオンとその近衛兵を殺し、そのあとに王権を受け継いだアリアドネと講和を結んだ、というまるで歴史書のような紀元前4世紀の説を詳しく紹介すらしている (*Thest.* 17-19)。

クレタから連れ出されたのち、なんらかの理由でアリアドネがアテーナイについて行けなかったことについても、他の女性にテーセウスが心変わりしたことが原因であるというヘシオドスに由来するバージョン(どうやら、プルタルコスはこれが一番信用できると考えているようである)や、旅の途中で産褥で死んでしまったという話は紹介するが、有名なアリアドネがディオニュソスに見初められたため、という説については次のような、仄めかす文章があるだけである。

ἃ δ' ἐστὶν εὐφημότατα τῶν μυθολογουμένων, πάντες ὡς ἔπος εἰπεῖν
διὰ στόματος ἔχουσιν.

物語が語ることのなかの、もっともめでたい話は全員の口の中にある (*Thest.* 20)

アリアドネについても後世に伝えられた儀礼が紹介されている (*Thest.* 20)。

テーセウスが無事の知らせの白い帆をあげるのを忘れたためにアイゲウスは自殺してしまうが、プルタルコスではテーセウスが帆をあげるのを忘れたのは、「うれしさのため (ὕπο χαρᾶς)」であった、ということになっている (*Thest.* 22)。アイゲウスの自殺、テーセウスの帰還についても、それにまつわる儀礼や建造物が紹介される (*Thest.* 21-23)。序文で宣言したように、ミノタウロス退治をめぐる冒険について、プルタルコスはできうる限り現実的な伝承で構成しようと努めている、といえる。

ディオドロスでは、テーセウスがなぜ生贄の一行に加わることになったのか書かれておらず、物語はアリアドネの援助を受けてのミノタウロス退治とディオニュソスによるアリアドネの略奪、と非現実的なものを受け入れた一本に絞られている。ディオドロスは、テーセウスがアリアドネをディオニュソスに奪われたというバージョンのみを採用しているわけであるから、帆を取り替えるのを忘れていたのはアリアドネを奪われて「ひどく怒っていて、悲しんでいたせい (δυσφοροῦντας ἰσχυρῶς, καὶ διὰ τὴν λύπην)」だったことになる (4.61.6)。歴史家ディオドロスが伝記作家のプルタルコスとは逆に、ミノタウロス伝承についての現実的なバージョンについては興味がないのである。

アポロドーロスのバージョンも、やはりよく知られた非現実的な神話であるが、アポロドーロスにしては珍しく、テーセウスの内面の説明がある。一説として紹介しているだけであるが、クレタに向かった

のはテーセウス自身の「意思 (ἐκὼν)」だったとし、帆を変えるのを忘れていたのはディオニュソスにアリアドネを奪われて「嘆いていたため (λυπούμενος)」ということになっている。なお、異伝があると紹介する傾向のあるアポロドーロスが、アリアドネを失ったことについては、ディオニュソスにさらわれた非現実的なバージョンしか紹介していない (*Ep.* 1.7-10)*¹⁸。アポロドーロスが現実的な話をあえて無視していることがわかる。

V. アテーナイ統治

アイゲウスが死んだのちテーセウスが後継者となり、アテーナイを統治することになる。歴史的な政治家としてのテーセウスの側面が明らかになる時期に当たる。

プルタルコスのここの箇所の内容は実に豊富である。集住、シュノイキスモスと呼ばれる政策を実行して、アッティカ地方の各地にばらばらに住んでいたアテーナイ人を一つのポリスにまとめた。注目すべき点は、テーセウスが民主制下の政治家のように「説得」を用いて実行した、ということである。

ἐπιῶν οὖν ἔπειθε κατὰ δῆμους καὶ γένη

そこでテーセウスは、出かけて行って地方ごと氏族ごとに説得した。 (*Thest.* 24)

*¹⁸ アリアドネを奪われたバージョンを採用しているディオドロスとアポロドーロスでは、テーセウスが帆をかえるのを忘れたのは、アリアドネを失った悲しみのためだということになっている。一方、プルタルコスでは、帰国のうれしさのために帆をかえるのを忘れたことになっている。だから、プルタルコスはアリアドネがディオニュソスに奪われたというバージョンではなく、他の女性に心変わりをしたというヘシオドスのバージョンを信用しているのであろう。

これは、対比されているローマのロムルスが強権的な国王であり、主に戦争によって国力を確保したのとは対照的である (*Rom.* 17, 24-25)。また、パナテナイア祭やイストミア競技祭などの重要な祭祀を定め、貨幣を鑄造し、貴族、農民、職人と身分を分けた上で、王政を廃止した、ということにもなっている。現存するテーセウスに関する記述で、プルタルコスをもっとも豊富にテーセウスの政治活動について言及している (*Thes.* 24-25)*¹⁹。

ディオドロスは歴史家であるが、プルタルコスほどテーセウスの政治的指導者としての事跡についてふれていない。具体的に触れているのはシュノイクスモスのことくらいである。ただ、テーセウスに他にも多くの政治的な事跡についての伝承のあったことは知っている。

ἦρχε τοῦ πλήθους νομίμως καὶ πολλὰ πρὸς αὐξήσιν τῆς πατρίδος
ἔπραξεν

テーセウスは民衆を法に沿って統治し、祖国の隆盛に向けて多くのことをなした。(4.61.8)

ディオドロスはテーセウスの怪人・怪物退治を詳しく説明しているので、テーセウスの世界史への貢献は、アテーナイの為政者としてよりも、ヘラクレスのような怪人・怪物を退治した文化英雄としてのほうが大きいと考えていたのであろう。

アポロドーロスは、テーセウスの政治的な側面をまったく紹介していないといってよい。ただ、アイゲウスから支配権を受け継いだ直後に政敵のパラスの五十人の子供を殺した、という記事があり、強いて言えばこれを政治的な記事と解釈が出来るくらいである (*Ep.* 1.11)。もっとも、五十人の子供を皆殺しにしたというのはダナオスの娘たち

*¹⁹ テーセウス伝承にマルクス主義の歴史家としての立場からアプローチした、太田秀通『テセウス伝説の謎』(岩波書店、1982年)は、分析の多くをプルタルコスの『テーセウス伝』の政治家としてのテーセウスに関する記述の解釈に費やしている。

の物語のようであり、非現実的なエピソードとも取れる。なお、この事件については、プルタルコスがテーセウスがパラース側の伏兵の作戦を見破って市街戦で勝利するという、きわめて現実的なバージョンを採用している (*Thest.* 13)。

VI. アマゾン族との戦争とヒッポリュトス

i. アマゾン族との戦争

国政改革を行う一方、テーセウスはアマゾン族の住む地方へ遠征し、その女王を連れ去ったために、アマゾン族がアテーナイに攻め寄せ、大規模な戦争になったと言われる。

プルタルコスはアマゾン族遠征の記事を書いた作家を何人か検討して、ヘラクレスとともにではなく、テーセウスがヘラクレスと別にこれを行ったとする (*Thest.* 26)。そしてテーセウスがアマゾン族の女王(女王の名はさまざまに伝えられていてプルタルコスは名前をアンティオペあるいはヒッポリュテとする)を誘拐したために起こったアマゾン族とアテーナイの戦争を現実の戦争のように詳しく記述する。まず、戦争がアテーナイ市内で行われたことになっていることから、おそらくアテーナイの周辺地域をアマゾン族は占領していたのであろうと推測し、アテーナイ軍は市内に侵入してきたアマゾン族の右翼軍はなんとか撃退したが、左翼軍には押されて、アレイオスバゴス付近のエウメニデスの神域まで撤退することを余儀なくされたことになっている。そして、4ヶ月の戦いののち、誘拐されたアマゾンの女王の仲介で講和した (*Thest.* 27)。プルタルコスはこのアマゾン族との戦いについて、文献に当たるだけでなく、実際の遺跡にも言及しており、地名や戦死者の墓を事実であった証拠としてあげている。しかし、アマゾン族にまつわる地名や遺跡はアテーナイ以外にもメガラやテッサリアなどの各地にあったために、プルタルコスはこれを結局は整合的に解釈することはあきらめて、

καὶ θαυμαστὸν οὐκ ἔστιν ἐπὶ πράγμασιν οὕτω παλαιοῖς πλανᾶσθαι
τὴν ἱστορίαν

このように古い事柄について記録がばらばらなのは驚くに値しない (*Thes.* 27)

としている。

プルタルコス『アレクサンドロス大王伝』『ポンペイウス伝』など他の伝記ではアマゾン族の存在について懐疑をしめすような記述をしており (*Alex.* 46; *Pomp.* 35)、『テーセウス伝』の記述との整合性が問題となる*20。しかし、プルタルコスはテーセウス伝承にまつわるアマゾン族については実に様々な文献や地名、遺跡を調査しており、その結果、すくなくともテーセウス伝承に出てくるアマゾン族は実在する、と信じたと考えるのが妥当であろう。プルタルコスまた、今日では失われたテーセウスに関する叙事詩『テーセイイス』を取り上げ、アマゾン族の女王がパイドラとテーセウスが結婚したので攻め寄せてきたというその内容を、「物語 (μύθος)」で「作り物 (πλάσματι)」だとする (*Thes.* 28)。プルタルコスはアマゾン族にまつわる物語について取材した作家の一人クレイデモスのことを、「いちいちのことを正確にしようとしている (ἐξακριβοῦν τὰ καθ' ἕκαστα βουλόμενος)」と皮肉っぽく評しているが (*Thes.* 27)、それはプルタルコスのテーセウスとアマゾン族の物語に対する取材態度にも共通するものである。ここは、現実的な伝承にできるかぎり従うとした序文の方針が、もっともよく展開されている箇所である。

ディオドロスでは、テーセウスはヘラクレスに従ってアマゾン族のところへ遠征したことになっているので、テーセウスとアマゾン族の話はテーセウスのところではなく、ヘラクレスのところであつてゐる。ディオドロスによると、アマゾン族の女王を譲られたテーセウスはこ

*20 Pelling, *op. cit.* (n. 15), 176–177.

れを「奴隷とした (καταδεδουλῶσθαι)」ため、怒ったアマゾン族がスキタイ人と同盟をして攻め寄せてきた (4.28.1)。そして、はるか黒海の北、クリミア半島の東のキンメリアのボスポラス海峡*21を渡ってアテーナイに攻め寄せ、テーセウスがこれを迎え撃ち、さらってきた女王もテーセウスに従って戦い、戦死した*22。ディオドロスはアマゾン族については、やや非現実的な要素を含むものの現実的なひとつのバージョンを採用していることになる (4.28.1-4)。ミノタウロスや、後述する冥界下りまでも記述してしまうほど非現実的なものでも受け入れる用意のあるディオドロスがなぜ、アマゾン族に限って、『テーセーイス』で伝えられたような、捨てられた女王が結婚式に殴りこんだという物語的バージョンを採用する気にならなかったのかは不可解である。『テーセーイス』は古代でも悪い評判のある叙事詩であったので (アリストテレス『詩学』第8章を参照)、あるいは、それほど権威がなかったのかもしれない*23。

アポロドーロスは、テーセウスはヘラクレスと共にアマゾン族へ遠征したこと、テーセウスが奪ったアマゾン族の女王の名は作家によって、アンティオペ、メラニッペ、ヒッポリュテ (アポロドーロスはこの名前はシモニデスの伝えるものだとする)、など様々に伝えられていることを紹介したのち、アマゾン族がアテーナイに攻め寄せたが、これを撃退したことを簡単に述べ、アマゾン族の女王がパイドラとテーセウスの結婚式に武装して乱入したものの、一説にテーセウス自身の手によって殺されたことになっている*24。アポロドーロスは現実の戦

*21 アゾフ海と黒海を結ぶ今日のケルチ海峡。

*22 プルタルコスもアマゾン族がクリミア半島あたりからやってきたこと、アマゾン族の女王がテーセウスと共に戦って死んだことを異伝として伝えている (*Thes.* 26-27)。前者のクリミア半島付近を通った、という説について、プルタルコスはこれを紀元前5世紀のヘラニコスによるものとし、合理性がないとして採用はしない。

*23 cf. G. L. Huxley, *Greek Epic Poetry* (1969), 113-122.

*24 *Ibid.* 116.

争に似た伝承をまったく記述せず、非現実的な物語を積極的に採用していることになる (*Ep.* 1.16–21)。

ii. ヒッポリュトス

アマゾン族の女王から生まれ、エウリピデスやセネカの悲劇で有名になったヒッポリュトスと継母のパイドラの恋愛の物語を、この3者がどのように描写しているのかを考察する。

これまで見てきたように、さまざまなバリエーションを紹介する傾向のあるプルタルコス『テーセウス伝』であるが、パイドラとヒッポリュトスに関しては、次のような簡単な叙述があるだけである。

τὰς δὲ περὶ ταύτην καὶ τὸν υἱὸν αὐτοῦ δυστυχίας, ἐπεὶ μηδὲν ἀντιπίπτει παρὰ τῶν ἱστορικῶν τοῖς τραγικοῖς, οὕτως ἔχειν θετέον ὡς ἐκεῖνοι πεποιήκασιν ἅπαντες.

パイドラとテーセウスの息子ヒッポリュトスとの不運については、歴史家たちから悲劇作家たちになんの反論もしていないので、すべて悲劇作家が劇作したとおりとすべきである。 (*Thest.* 28)

これに対してディオドロスでは、ヒッポリュトスに恋をしたパイドラが不倫を呼びかけ、ヒッポリュトスが拒絶したためにパイドラが逆恨みをしてテーセウスに讒訴、ことの真偽をテーセウスが調べようとしたのでパイドラは自殺、動揺したヒッポリュトスはテーセウスの元へ弁明に向かう途中、戦車の運転をあやまって事故死した、ということになっている (4.62)。テーセウスが感情をほとんど面に出していないことと (パイドラの話「疑った (διστάζοντος)」という記述があるだけである)、アプロディーテにもアルテミスにも、さらにはテーセウスのポセイドンの呪いへの言及もまったくなく、かなり現実的な話になっていることが特徴である*25。序文において現実的に記述を行う

*25 In his usual rationalistic vein Diodorus omits all mention of Poseidon and the

と宣言していて、ミノタウロス退治などでは極端に現実的な伝承を紹介し、また、ディオドロスを読んでいるはずのプルタルコスが、なぜ、この話を採用しなかったのかは判然としない。あるいは、これはよほどマイナーな話なのかもしれない。

アポロドーロスでは、アプロディーテとアルテミスは出てこないが、呪いが登場し、パイドラの讒訴を信じたテーセウスがポセイドンの呪いをかけ、海から牡牛が現れ、これに驚いた馬が暴れて戦車が暴走、ヒッポリュトスは死んでしまうことになっている。3者のなかでは最も非現実的な話を採用していると言えるであろう (*Ep.* 1.18–19)。

VII. 冥界下り

次に、テーセウスがヘレネをさらったのち、盟友ペイリトウスと共に冥界に下ってペルセポネを誘拐しようとして失敗し、冥界に幽閉されるもののヘラクレスに助け出される物語を、3者がそれぞれどのように扱っているかを考察する。

プルタルコスではまず、テーセウスがペイリトウスとどのような経緯で友人となったか、また、ケンタウロス退治などで両者がいかに友情を深めていったかを詳しく記述する (*Thest.* 30)。プルタルコスは半身人間、半身馬のケンタウロスについては、とくに現実的な解釈はしていない。

友人同士となったテーセウスとペイリトウスはまだ子供であったヘレネを誘拐、くじを引いた結果、ヘレネはテーセウスが取ることになり、ペイリトウスにはペルセポネを手に入れようということになる。ここで、プルタルコスは有名なテーセウスの冥界下りの伝承を完全に無視し、ペルセポネとはモロッソイ族の王アイドネウスの妻の名であ

sea-bull, and ascribes the accident which befell Hippolytus to the mental agitation he felt at his stepmother's calumny. (J. G. Frazer *Apollodorus The Library* II (1921) 147.)

り、コレーという名の娘があつて、アイトメネウスはケルベロスという犬を飼つていて、これに勝つたものに娘をやることにしていた、という説を採用する (*Theis.* 31)。犬と対決して勝つたものに娘をやるというのは民話のようで完全に現実的な話とはいえないが、生きた人間が冥界に下つて冥界の女王をさらおうとしたのよりは現実的な話である。プルタルコスによるとペイリトウスは犬に食い殺され（まがりなりにもテーセウスが「感嘆した (ἐθαύμασε) (*Theis.* 30)」英雄ペイリトウスを食い殺したのであるから、犬といつても怪物に近いものであろう)、テーセウスは牢につながれる。そして、のちにヘラクレスがアイトメネウスのもとを訪れて、テーセウスを解放してもらう (*Theis.* 35)。

ディオドロスの冥界下りについての説明は変則的である。まず、普通にテーセウスが生涯を終えるところまで筆を進めて、テーセウスの遺体が死んだ亡命先からアテーナイに戻され、神域を与えられて祭られた、という記述を終えた後、付録のようにして冥界下りについて触れている (4.63)。ディオドロスのバージョンでは実際に生身のテーセウスとペイリトウスが冥界に下つたことになっている。そして、特徴的なのは、このような弁明の仕様のない非道で不敬虔な行為を行った理由をペイリトウスへのテーセウスの友情のゆえであつた、と好意的に見ていることである。

τὸ μὲν πρῶτον ὁ Θησεύς μετέπειθεν ἀποτρέπων τῆς πράξεως αὐτὸν διὰ τὴν ἀσέβειαν, τοῦ δὲ Πειρίθου βιαζομένου συνηναγκάσθη διὰ τοὺς ὄρκους ὁ Θησεύς μετασχεῖν τῆς πράξεως.

最初、テーセウスは不敬虔なので行動をやめさせようとペイリトウスを説得したが、ペイリトウスが圧倒し、テーセウスは誓約のゆえにこの行為に協力することを余儀なくされた (4.63.4)

テーセウスが冥界へ下つたのは友情を重んじるゆえであつた、というのは古典期のイソクラテスの著作にすでに見える解釈である (*Isoc.* 10.20; cf. *Plato, R.* 391c–d)。

アポロドーロスがテーセウスとペイリトウスがヘレネをさらったこと、テーセウスがヘレネを取るようになったこと、ペイリトウスのために冥界に下ってペルセポネをさらおうとして失敗し、テーセウスだけがヘラクレスに助け出されたことが述べられる。やはり、アポロドーロスの場合は、非現実的なバージョンが採用されていること、また、動機が描かれていないこと、が特徴である (*Ep.* 1.23–24)。

VIII. テーセウスの最後

最後に、ヘレネ誘拐が原因でスパルタとアテーナイが戦争になったこと、テーセウスがペイリトウスのためにペルセポネを求めに行ったことなどが原因でアテーナイを追放され、亡命先のスキュロス島で生涯を終える伝承を考察する。

プルタルコスのテーセウスの晩年に関する記述は、あたかも現実の民主主義体制下の有能な政治家の失意の晩年のようである。まず、テーセウスの留守のうちにメネステウス（古いアテーナイ王のエレクテウスの子孫で、ホメロスにも言及がある人物 (*Il.* 2.552)) が反テーセウス運動をはじめた。プルタルコスは彼を扇動政治家の元祖であったとしている (*πρῶτος ... δημαγωγεῖν*) (*Thest.* 32)。メネステウスは平民、貴族、双方にテーセウスに対する不審を植え付けることに成功すると、さらに、ヘレネを奪回に来たディオスクーロイとうまく和解してアテーナイとスパルタが全面戦争に陥ることも防ぐ。プルタルコスはこのスパルタ軍のアテーナイ侵攻そのものがメネステウスの誘致によるものという説も紹介する。こうして、民衆も貴族もテーセウスに不審をもち、メネステウスの影響力が強まったところへテーセウスが戻ってきて、以前のように指導を行おうとするが、当然うまく行かず、テーセウスは亡命に追い込まれる。プルタルコスによればテーセウスは王政を廃止し、民主制を導入したことになっている。アテーナイをひとつにし、民主制を創始したテーセウスが、その民主制の産物である扇

動政治家によって失脚した、という皮肉な結末を迎えたことになっているわけである。テーセウスは亡命先のスキュロス島で、テーセウスの名声を恐れたか、メネステウスの機嫌を取ろうとしたリュコメデスに暗殺されるか、あるいは、事故死して生を終える*26。

プルタルコスはこのあと、テーセウスが神的な存在となってマラトンの戦いに参加したという証言のあること、後世の政治家キモンが鳥の吉兆という不思議な力に導かれてスキュロス島でテーセウスの遺骸を発見し、これをアテーナイに連れ戻したエピソードも付け加えて、『テーセウス伝』を終える (*Thes.* 32–36)。

ディオドロスのテーセウスの最後に関する記述は、ごく簡単なものである。

Θησεύς δὲ μετὰ ταῦτα καταστασιασθεὶς καὶ φυγὼν ἐκ τῆς πατρίδος ἐπὶ τῆς ξένης ἐτελεύτησεν

テーセウスはヒッポリュトスとパイドラの事件ののち、反対派に圧倒されて、故国を逃れ、異国で死んだ (4.62.4)。

ディオドロスは、テーセウスが政争に破れて失脚し、亡命先で死んだ、という政治家としての最後を明確に伝えている。

アポロドーロスの場合もテーセウスの最後に関する記述も簡単で、次のようなものである。

*26 テーセウスは王政を廃止したために民衆によって殺された最初の政治家になったとの説が、テオプラストスにみえる。

καὶ δίκαια αὐτὸν παθεῖν· πρῶτον γὰρ αὐτὸν ἀπολέσθαι ὑπ' αὐτῶν.

そして、テーセウスは(シュノイキスモスと王政廃止に)相応しいことをこうむった。すなわち、彼は民衆によって最初に殺されたのである。(Theophr. *Char.* 26.6)

ἐκεῖθεν δὲ ὑπὸ Μενεσθέως ἐξελαθεὶς πρὸς Λυκομήδην ἦλθεν, ὃς αὐτὸν βάλλει κατὰ βαράθρων καὶ ἀποκτείνει.*27

それからテーセウスはメネステウスに追い出されて、リュコメデスのところへ行き、リュコメデスはテーセウスを裂け目に放り込んで殺した (*Ep.* 1.24)。

アポロドーロスでは、記述はほとんど話がわからなくなってしまうくらいに省略されてしまっている。メネステウスが何者なのか、なぜ、テーセウスを追放したのか、なんの説明もない。アポロドーロス単独では、テーセウスの人生の最後に何が起こったのかわからないであろう。アポロドーロスが現実的なバージョン、それもとくに政治的なバージョンを無視していることはこれまでも見てきたが、これもその例である。問題なのは、なぜ、アポロドーロスがテーセウスはペイリトウスとともにまだ冥界に捕らわれたままである、というバージョンを取って、非現実的な話で一貫させなかったか、ということである。テーセウスがいまだ冥界にいるというのはホメロスにもみえる話で (*Od.* 11.631; cf. *Thes.* 20)、後代でも、ウェルギリウスなどはこのバージョンを採用している*28。だから、アポロドーロスは無理にテーセウスが政争に敗れて追放されて亡命先で死んだというバージョンを採用しないこともできたはずである。テーセウスが亡命先のスキュロス島で死んだという話はただの神話ではなく、アテーナイによるスキュロス島領有の正当化、スキュロス島でテーセウスの遺骸を発見したとする政治家キモンの政治的野心、政敵対策、さらにはアテーナイ帝国の海上覇権、などといった政治的な事情に密接に結びついた生臭い話で

*27 テキストは、J. G. Frazer, *Apollodorus The Library* Volume II (1921 Loeb) による。

*28 *sedet aeternumque sedebit infelix Theseus* (*A.* 6.617–618), cf. R. G. Austin *Aeneidos Liber Sextus* (1986) 77; Paus. 1.17.4.

あったようだ*29。アポロドーロスは古典期の神話を採用することを重視しており*30、その古典期にアテーナイが流布することに腐心したにちがいないテーセウスがスキュロス島で死んだというバージョンを、アポロドーロスは不採用とすることができず、結果として稚拙な形で収録することになったのであろう。

IX. 結論

テーセウス伝承に関するディオドロス、プルタルコス、アポロドーロス、3者のそれぞれの対処は以上のようなものである。では、ここからどのようなことが言えるのであろうか。

i. ディオドロスのテーセウス

まず、ディオドロスの場合は人類史上の文化英雄として重要なテーセウスを歴史のなかに受け入れ、ミノタウロス退治や冥界下りなど神話的でかなり非現実的なバージョンでも記述していることがわかる。そして、さまざまなバージョンが伝えられるテーセウス伝承を思い切ってひとつの筋に絞っていることも大きな特徴である。文化英雄としてのテーセウス像を伝えることができれば十分で、異伝を紹介してアポロドーロスのような神話集にするつもりはないのである。さらに、

*29 cf. Plu. *Cim.* 8; A. J. Podlecki, 'Cimon, Skyros and 'Theseus' Bones', *JHS* 91 (1971), 141–143; R. Garland, *Introducing New Gods* (1992), 82–98; V. Goušchin, 'Athenian Synoikism of the Fifth Century B.C., or Two Stories of Theseus', *G&R* 46.2 (1999), 168–174.

*30 アポロドーロスの著作のうち、年代の特定できる 78 の取材源のなかで実に 58 がアルカイックから古典期のものである (Marie-Madeleine Mactoux, 'Panthéon et Discours Mythologique: Le Cas d'Apollodore', *Revue de l'histoire des religions* 206 (1989) 248)。また、採用されているバージョンで古典期のものが尊重されていることについては、M. van der Valk, 'On Apollodori Bibliotheca', *REG* 71 (1958), 100–168 を参照。

ディオドロスはテーセウスの内面にもある程度の興味を向けていて、ヘラクレスに競争心をもっていたこと、アリアドネを奪われたこと悲しんだこと、ペイリトウスに友情をもっていたことを記し、またシュノイクスモスを行うなど政治家としての手腕も持っていて、最後には政争に敗れて国を追われて死んだことなどテーセウスの現実的政治家としての側面の記述もある。ただし、内面、政治家としての側面、いずれも記述は断片的で、具体的で深みのあるテーセウスの内面や、政治家としての手腕について、詳しくうかがい知ることはできない。

ii. アポロドーロスのテーセウス

アポロドーロスの特色は、徹底して非現実的なバージョンを採用し、簡単であるが異伝があるときは、それにも目を向けていることである。このことは、今日、ギリシア神話の一大取材源であり、古い神話体系をそのまま記述しているといわれるアポロドーロスの叙述態度を検討するのに示唆的である^{*31}。テーセウス伝承についての叙述態度を見るとアポロドーロスは漫然と古い神話を書き写すだけでなく、取捨選択を行って、ことさら非現実的なバージョンを採用していることがわかる。そして、非現実的な神話を好むあまり、かなり古い伝承でも現実的な場合には採用しないことすらある。テーセウスが別の女性に心を移したためというヘシオドスのバージョンがあるのに、アリアドネが

*31 「古典時代のギリシアの伝承を真面目に、忠実に伝えている。著者は神話の伝承に対して極めて僅かの例外を除けば、全然批判せず、また異なる伝承間の比較や研究も行わない（高津春繁訳『アポロドーロス ギリシア神話』（岩波文庫、1953年）7頁）」；「Un premier trait frappant est que le mythe est réduit à lui-même. Il n'est pas intéger dans un cadre global d'interprétation allégorique. Il ne s'agit pas de proposer une lecture philosophique des mythes grecs (les *Allégories* d'Héraclite...), ni de les rationaliser, pour occulter tout élément merveilleux et retrouver une vraisemblance historique (Evhémère)」(C. Jacob, 'Le Savoir des Mythographes', *Annales* (ESC) 49 (1994), 423.)

ディオニュソスにさらわれた、という非現実的なバージョンしか紹介しないのがその例である。取材源である古典期の神話はその時代の事情でテーセウスの最後について政治的な話を採用している場合には、アポロドーロスが話が不明になるくらい簡略にしてから紹介するのも、非現実的な神話を好むことから出たことであろう。

ディオドロスの第4巻の冒頭、およびプルタルコスの『テーセウス伝』の序文によれば、「神話」というのは非現実的で歴史叙述には適さないものであるという前提がある。この認識をアポロドーロスも共有していたとすれば、アポロドーロスは「神話」の採用をこの3者のなかで最も徹底して行っている、ということができ*32。

さらに、テーセウスの内面をほとんど描いていないことも大きな特徴である。アポロドーロスは一説としてテーセウスが自らの意志でクレタに赴いたことを紹介し、アテーナイに帰還したときに帆を変えるのをわすれたのはアリアドネを失った悲しみのせいであった、としているぐらいしか、テーセウスの内面の描写はしていない。

iii. プルタルコスのテーセウス

プルタルコスの場合は一見すると、アポロドーロスとは反対に、できるだけ現実的なバージョンを採用していることが特徴であるように見える。実際、プルタルコスは多くの文献に当たって考証を行い（文献のほとんどが紀元前5世紀から3世紀の合理的な散文作家で、一番

*32 このアポロドーロスの方針によって採用された「神話」が、他の文化の神話との対比に耐える良質なものであったことは、他の印欧語族の神話との比較において有益であったことからわかる (cf. K. Tuite, 'Achilles and the Caucasus', *Journal of Indo-European Studies* 26 (1998), 289–343)。ただし、神話的な英雄の側面と古代の伝説的な統治者としての側面を併せ持つことが特徴であるテーセウス伝承について、その政治的・現実的な側面をほとんどすべて削いでしまったことはテーセウス伝承の魅力を半減させてしまう結果をもたらしている。

新しいのはディオドロスである)、祭祀や遺構も参考にして、伝承が事実に基づいているように装っている*33。そこで、『テーセウス伝』は古代における神話の現実的解釈の典型であるとされ、一種のエウヘーメリズムだと評されたり*34、『テーセウス伝』の序文は古代の合理的な神話解釈の方針をよく表していると評されたりする*35。

しかし、プルタルコスの『テーセウス伝』はただの神話の現実的解釈、というだけでは収まらない要素を含んでいる。まず、怪人・怪物の類が存在し、アマゾン族、ケンタウロスなどが登場し、テーセウスの冥界下りのかわりに採用されているバージョンも、飼い犬を打ち負かしたものに娘をやる、という現代人から見れば非現実的なものになっていることが問題となる。これは、プルタルコスその他の古代の合理主義が、近代のように厳格なものでなく、『テーセウス伝』の序文で言われているように古い話についてはある程度弾力的に理解していた、と解釈できなくもない。

しかし、『テーセウス伝』のテーセウス死後の記述は現実主義の視点からだけでは理解できない。すなわち、プルタルコスは「テーセウスの霊 (φάσμα Θησέα)」がマラトンの戦いに参加したこと (*Thest.* 35)、キモンが鳥による「なにかしらの神がかり的な幸運 (θεία τινὶ τύχη)」に導かれてテーセウスの遺体を見つけたなど (*Thest.* 36)、非現実的な話を採用していて、それをほぼ無批判に受け入れているのである。さらに、『テーセウス伝』と対になってひとつの作品を構成している『ロムルス伝』の叙述を検討してみると、ロムルスのサビニ族の娘たちの

*33 アポロドーロスも神話を儀礼の起源として紹介している箇所があるが (III. 15.7)、伝承の真実性の保証とは関係がない。プルタルコスが取材した合理的な神話解釈を行う神話作家については、R. L. Fowler, 'Herodotos and His Contemporaries', *JHS* 116 (1996), 69-76 を参照。

*34 R. Flacelière, E. Chambry, E. Juneaux, *Plutarque Vies Tome I* (2003), 9-11. Flacelière は合理的な解釈をする散文作家の中でもピロコロスの影響を指摘している。

*35 F. Graf (tr. T. Marier), *Greek Mythology* (1996), 124.

略奪とそれに伴う戦争は、女性たちの介入という「見るも不可思議な光景、言語を絶した奇観（δεινὸν ἰδεῖν θέαμα καὶ λόγου κρείττων ὄψις）（*Rom.* 19）」によって収束したことになる。ロムルスとレムスが祖父のヌミトルと奇跡的な再会を果たす神話的な話も、非現実的なバージョンを採用したあとに、

ὑποπτον μὲν ἐνίοις ἐστὶ τὸ δραματικὸν καὶ πλασματῶδες, οὐ δεῖ δ' ἀπιστεῖν τὴν τύχην ὀρώντας οἷων ποιημάτων δημιουργός ἐστι, καὶ τὰ Ῥωμαίων πράγματα λογιζομένους, ὡς οὐκ ἂν ἐνταῦθα προὔβη δυνάμεως, μὴ θεῖαν τιν' ἀρχὴν λαβόντα καὶ μηδὲν μέγα μηδὲ παράδοξον ἔχουσιν.

この話が芝居じみでいて、作り話のようだと怪しむ人たちもいる。けれども、運というものがかくの如き（不思議な）物語の作り手であることを知っていて、なにかしら神的な起源やとても信じられないこと抜きにはローマの国運が今日までの権勢に進まなかったことを思い巡らすならば、疑ってはならない（*Rom.* 8）。

とまで言っている。また、プラトニストのプルタルコスには受け入れがたいことが明白であるロムルスが生身の肉体をもったまま昇天したという有名な伝説についても、実際は暗殺されたという政治的なバージョンを採用せず、なんとかローマの昇天伝説を受け入れようと苦労している（*Rom.* 28）。このように、同じ作品でありながら、ロムルスについてプルタルコスはかなり非現実的なバージョンを積極的に採用しており、『ロムルス伝』はローマのプロパガンダ的神話に迎合しているときえ言われる^{*36}。

このように『テーセウス伝』と『ロムルス伝』で伝承への対応がちがうことは、どのように理解したらよいのであろうか。その鍵は、末尾の『テーセウスとロムルスの比較』にみえるプルタルコスの独自の

^{*36} C. P. Jones, *Plutarch and Rome* (1971), 94.; cf. K. Scott, 'Plutarch and the Ruler Cult', *TAPhA* 60 (1929), 117-135.

テーセウス理解にあるのではないか。プルタルコスによれば、ロムルスが「強要されて (δι' ἀνάγκην)」ローマを建国したのに過ぎないのに対して、テーセウスはそのまま平穩にトロイゼンの王位を継げたにもかかわらず、自らの「選択によって (ἐκ προαιρέσεως)」危険を冒してアテナイに向かい、人生を切り開いていった人物であるということになっている (Rom. 30)。また、「ロムルスには多くの神々の恩恵の救いがあった (Ῥωμύλω μὲν γὰρ ἡ σωτηρία μετὰ πολλῆς ὑπῆρξε θεῶν εὐμενείας)」のに対して、アイゲウスは神託に逆らってテーセウスをつくったわけだから、「テーセウスは神々の意志に反して生まれた (παρὰ γνώμην θεῶν γεγονέναι τὴν Θησέως τέκνωσιν.)」のだとしている (Rom. 35)。つまり、プルタルコスはロムルスが神々の恩恵を受けつつ必然に動かされてローマを建国したのに対して、テーセウスは神々の意図に反して生まれながら、自分の意志で人生を切り開いていった人物、と考えていたのではないか。プルタルコスは、この自らのテーセウス理解に基づいて、神々が介入せずテーセウス個人の力量で話が展開する現実主義的な散文作家たちのバージョンを積極的に採用したのではないか。そう考えれば、テーセウスの生きている間は非現実的なバージョンが避けられ、テーセウスの死後に非現実的な要素が登場し、『ロムルス伝』においては不可思議な力が介入するバージョンが積極的に採用されていることの説明を付けることができる。

さらに、プルタルコスの『テーセウス伝』では、テーセウスの野心にあふれる内面を生き生きと描いて、女好きで競争心の強く、説得、知略を得意とする人物としていること、また、現実的なテーセウスの政治政策について詳しく記述していることも特徴的である。このことによって、プルタルコスはおおむねテーセウスに一貫した性格を与えることに成功しており、野心を持った若者が実力を示して指導者へと申し上がるが、自ら作った民主制が扇動政治家を生み出してしまい、亡命に追い込まれて不遇な死を遂げ、後世に再評価される、という人生のアウトラインをテーセウスに与えている。

iv. 結語

ディオドロスの主たる関心は、テーセウスをヘラクレスのような人類の恩恵者として世界史上に位置づけることにあった。だから、紀元前6世紀までに成立した文化英雄としてのテーセウスの怪人・怪物退治、ミノタウロス退治などには筆を割くが、アテナイの為政者としてのテーセウスにはほとんど興味をもたない。人類の恩恵者なのだから、その内面については好意的に解釈していて、ペルセポネをさらおうとしたという不敬虔な悪事についてすら、友情を理由としてテーセウスを擁護している。そして、テーセウスを自らの歴史の構想のなかに取り込めればよいので、基本的に話のバリエーションはひとつしか紹介せず、神話集にならないようにしている。

アポロドーロスは、非現実的な伝承を連ねることによってテーセウスの生涯を描くという方針を徹底している。そのためには、アルカイック期の古い伝承すら無視することがあり、また、現実的で政治的なバージョンを紹介せざるをえなくなると、話がわからなくなるぐらい簡略にする。各時代によって異なって描写されるテーセウスの内面を、総合的に分析することはせず、ほとんどテーセウスの内面は描かない方針を貫いている。テーセウス伝承を全体として扱う場合、伝統的な伝承の中で性格に統一性があるとはいえないテーセウスの内面を描写しないことは、理解できる方法のひとつである。

プルタルコスは一貫した現実的なテーセウス伝承を集めてテーセウス伝を書く、という変則的なことを行っている。この叙述の仕方を Pelling がいうように、読者が神話の教養のあることを前提とした一種のゲームである^{*37}、というかどうかはともかくとして、異例なテーセウス伝になっていることは間違いがない（私は、前述したようにプルタルコスがテーセウスを神々の力を借りずに独力で人生を切り開いていった英

*37 Pelling, *op. cit.* (n. 15), 171–196.

雄、と解釈していたのでこのようなテーセウス伝になったのだと考える)。どちらにせよ、プルタルコスが神話を現実的に解釈する散文作家たちの著作を用いて、できるだけ現実的なテーセウス伝を書いた。そして、政治や戦争の事跡を詳しく紹介し、内面は政治家のように造形した。

このように、ディオドロス、アポロドーロス、プルタルコスは、テーセウス伝承全体について基本的には同じ伝承を同じ順序で紹介しつつ、異伝の採用や解釈によって三者がそれぞれの独自のテーセウス像を作り上げている。テーセウスはアルカイック時代から古典期にかけて、時代の要請や作家の個性によってさまざまに新しい解釈を付け加えられる英雄であったが、その傾向は、ローマ時代においてもなお、継続していたのである*38。

*38 ‘Es gibt wohl kaum eine Persönlichkeit der griechischen Sage, die in solcher Weise der ideale Ausdruck ihres Volkstums gewesen wäre wie Theseus.’ とはホメロスの時代から古典期にかけてのテーセウス伝承を年代順に検証した Herter の結論である。これをギリシア神話全体に当てはめるのは的を射ていないが、テーセウスに限っては、国民性だけでなく作家性にも大きく左右されるともすれば、おおむね正しい見解であろう (H. Herter, ‘Griechische Geschichte im Spiegel der Theseussage’, *Die Attike* 17 (1941), 227)。